

第六回 鴻文会総会



平成13年8月12日 於 山口大学学生会館

鴻
文

第 21 号
発行・鴻文会

山口大学 文理学部 文学科
人文学部 同窓会
山口大学人文学部内
電話 (083) 933-5200

(連絡事務所)
山口市平井773-2
神田ビル202
電話・FAX (083) 928-4527
郵便振替口座
01500-4-15902

鴻文会をよろしく

鴻文会会長 大野 光生

私どもが今あり、この同窓会に所属するのは、山口大学文理学部時代にお世話になったことによると切実に感じております。もし山口大学で学ぶことがなかったら、今の我々はなかったであろうと。大学に進学して学び、そこで多くの友を得、よき師に恵まれてここに至ったという事は、最大の喜びであると言わざるを得ません。新たな感慨にふけりながら皆さんにご挨拶申し上げます。

今日も何人かの現教官、旧教官の方、他学部の同窓会の来賓にもご出席いただきましたこと、心から感謝申し上げます。友と四年に一度再会できることは、非常に意義深いことだと思っています。私どもを導いてくださった諸先生方と再会し、旧友と出会う新たな高い交わりを結んでいく。我々は別れるのは死別であって生別はあり得ないと、かつて安岡章太郎は遠藤周作の死に対して弔辞を送りましたが、そういう強い絆を同窓会の中で築き合いこれからも立派な会にしていきたい、というふうにお願いいたしております。どうぞまた心新たに協力のお手伝いをお願いします。

新たな情勢を二、三ご報告します。昨今新聞等で「大学の再編成」という問題が起ころっています。構造改革が呼び声高らかに唱われています。我々は、かつて足で歩いていましたが、それが自転車に

なりバイクになり軽四輪になり普通車になる、旅行する場合は今は飛行機を使うというような時代に生きています。私は、原点に戻って人間のあるべき姿を再現するための手段としての構造改革だと理解しております。そうすると我々の、入学当時の履物さえまならず、食べ物も欠いていた時代に生きてきた経験が、これから生きてくるなど感じている次第です。恵まれた時代を生きてきた若い人たちにとっては、それより以下に下がることは大変厳しいことだと思いますが、考えようによっては、自分を試す場ができるのではないかと思います。文部科学省の考えはこうです。全国に一〇〇近くある国立大学には多額の費用がかかる。(金に替えられないものがあるのでは) 大学が使う金には浪費の部分があると。そこに「大学を改革しなくてはならぬ」という掛け声がありました。統合や不必要な大学の廃止を考えているようです。

私どもにとって伝統ある山口大学が母校です、山大を今後ますます立派なものにしていくために、同窓会の何らかの力添えが必要ではなからうか。こういう声が出ました。それ以前に、全学部の同窓会の連合体、山口大学同窓会連合会が発足しております。そこから、それぞれの同窓会の皆さんの援助を仰いで、山口大学支援財団を設立し資金的

なバックアップをしようというような動きが生まれて、ご案内の通り皆さんのところへ募金をお願いの文書が送られたかと思えます。後で学長自らその実態をお話になると思いますが。どうか、山口大学の現状をご理解いただきたいと思えます。

新たな団結で新生の山口大学を盛り立てていく支援の団体としての機能を果たさなければならぬということを考えて、昨年の鴻文会報でも有馬会長の名で募金をお願いしたわけでございます。その連合会で、霜仁会や常盤工業会、鳳陽などの資金力は皆さんご存じの通りで、彼の場合は会員、役員の方々のご努力もあって寄付もある程度スムーズにいきそなうんですが、会員の終身会費以外は新入生の会費に依存している、我が鴻文会の場合はその点なかなか困難な状況にあります。そんなことは同窓会の役割でないという意見もあれば、積極的にバックアップすべきという意見もあるかと思えます。この問題についても忌憚のない意見をこの場でお出しください。

それともう一件、悩んでいる問題があります。例年「鴻文会名簿」を作成しておりますが、それが作りにくい状況が出てきていることです。最近ではNTTさえも、個人のプライバシーに係わるような様々な障害があるということで、電話帳すらもなくそうという動きがございます。その中で、私どもが、同窓会の名簿として、住所や電話番号、さらにその人の今置かれている立場などの詳しいものを作れば、それによって様々な弊害の起きることも考えられる、というような声

も上がってきております。学内幹事の方々の負担の重さの問題もあります。その意見にどう対応したものか、名前だけの名簿にするか？など、役員一同苦慮しているところなんです。卒業生としての拠り所となる名簿はきちっと作るべしという声が強ければ、しかるべき資金がないわけではありませんが、作らなければならぬと思うのですが。今までは考えられなかったような問題が起こっていることもお知らせして、ご協力を賜りたいと思えます。

最後に一言申し上げます。私の内発性なるものは、冒頭に申し上げたように、かつて山口大学で学んだという青春の光と陰がこの山口の地にあった。地球上でほんのわずかな世界かもしれないけれども、その中で得た私の青春、それがあったからこそ今の私があるんだと。皆さんにもそれがあろう。ならばその青春の光と陰の中で、こもこも泣き、笑い、そして、喜び合った青春をここで甦らせて同窓会がすばらしい会でありますように願っておるところであります。私どもの置かれていた時代というのは、先ほども申しましたように朝鮮戦争が終わったばかりの頃でもありましたし、東西両陣営の激突、学生、全学連の運動も激しい時代、先生方もますます、生徒はピースを親のへそくりで吸うのに教師はゴールデンバットを吸う時代で、非常に大きな矛盾もありましたけど、その中で暮らした日々を振り返ってみながら、いま感慨無量の気持ちでございます。本日に今日はお暑い中ありがとうございます。

(鴻文会総会での会長挨拶から)

第六回 総会・懇親会報告

前副会長 岡光一 浩

第六回鴻文会総会ならびに懇親会は、平成十三(二〇〇二)年八月十二日午後、山口大学学生会館で行われました。今回は、人文学部と旧文学部文学科の同窓会「鴻文会」が一九八一年に誕生して二十周年を迎え、四年に一度の総会が、二十年前第一回の設立総会を共に祝った理学部同窓会(現在「鴻理会」)の五年に一度の総会と同じ年にあたり、両者が更なる旧交を温めるとともに協力し合って今後を期すために、合同の同窓会を開催することとなりました。鴻理会とは、今はその母体も異なりますが、元々その母体と同じく文学部にもつというよしみで仲間も多く、これまで同窓会としてもできるだけ同じ歩調を取り、事務所も共有し、様々な問題に協力して対処してきました。私たちの同窓会が鴻理会に指導や教えを受け、恩恵を被った点は数え切れないほどあり、今回合同で同窓会を開催したいという声は自然に私たちの中高まりましたのも、これまでのことを考えれば当然ですが、そこには今後共に協力し合って大学の危機を救いたいという私たちの切なる願いも込められています。

当日、晴天の下に四十人の同窓生を集め、十二時三十分から総会が開かれました。柳場義治委員の開会の挨拶に続き、

有馬正人会長が病氣療養で欠席のため、大野光生副会長が代理で会長挨拶を行い、山口大学同窓会連合会や山口大学支援財団設立募金への協力を要請しました。続いて田中晋人文学部長が山口大学や人文学部の置かれている現在の状況について説明をしました。その後、立川和正委員を議長に選出して事業報告に移り、本田義昭幹事が四年間の事業報告と会計報告について、添田建治郎幹事が同窓会名簿について報告を行いました。これらの詳細についてはこの会報の報告をご覧いただきたい。北川健監事の会計監査の後、新役員の改選に移り、岡光一浩副会長により新役員の提案があり、大野光生会長・立川和正副会長・添田建治郎副会長体制を満場一致で承認しました。新しい役員についても、本会報に掲載してあります。十三時三十分過ぎ、大野新会長の今後四年間会長として諸問題を乗り切っていきたいという力強い決意の表明と会員の協力の要請をもって総会を終了しました。十四時より、鴻文会・鴻理会合同の公開記念講演会を開催しました。講師としてまず、昭和四十九年文学部理学科卒業の現土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏が「人骨から日本人の起源と未来を探る」と題する講演を行いました。弥生人の顔かたちの九州・山

口地域での地域差から話は始まり、未来の日本人の顔かたちの予想の後、短命化の道を進んでいる日本人に対する警告として「早食いは、早死にへの早道」という言葉で締めくくられました。氏の巧みな話術もあって大変興味の尽きぬ誰もが魅了された講演でありました。続いて、学長の広中平祐先生に「山口大学のこれから」と題して、今日の大学改革と山口大学の置かれている現状についてのお話をうかがいました。大学が今どのような危機にあるかを分かりやすくお話いただき、市民を交えた一〇〇名を超える聴衆の誰もが有意義に思う講演でありました。十六時三十分過ぎ、学生会館前で記念写真撮影の後、学内の学生食堂で合同の懇親会を行いました。再び柳場義治委員の司会進行によって、鴻文会・鴻理会の各新会長の挨拶の後、広中平祐学長に乾杯の言葉をいただき、祝宴に入りました。久しぶりの珍しい顔も多く、食事も脇にやって旧交を温めあう姿にあちこち歓談の輪ができ、誰しもが同窓生にしか味わえないなんとも心地よい空気に溢れた光景に酔った夕べでした。同窓会に対する励ましや温かいスピーチを人文学部、理学部の旧教官・現教官からもいただきました。また、山口大学の他の同窓会からご来賓の出席を得たことも感謝して記して置かなければならないことです。こうして十八時三十分、いつまでも名残のつきない二十一世紀最初の年の同窓会を終え、四年後の再会を誓ってそれぞれ家路に向かったのです。

人骨から日本人の起源と未来を探る

(日本人のルーツ)

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長

松下孝幸

先第6回鴻文会総会(八月十二日・理学部の鴻理会との合同開催)で行われました人類学ミュージアム館長松下孝幸氏のご講演内容を抄録の形で掲載いたします。

1. はじめに

私の専門は、生きた人間そのものを扱う理科系の形質人類学です。文科系的な文化人類学もあります。形質人類学との相違点は、文化人類学では人間が作り出した建物、習慣、制度などが研究対象であることです。

「日本人」はいつ頃から日本列島に住むようになったのか。古い化石の出土がアフリカに限られており、人類の誕生の地は多分アフリカです。日本列島での人類の誕生はありません。日本人の祖先はいつの時代か大陸から渡来したと推定されます。人が日本列島にいつ頃から住み始めたのかは、大きな問題です。北京原人は約五十万年前といわれていますが、その時代に日本列島にも人が渡ってきていたかどうか、考える資料が乏しいのが現状です。そこで私は、研究をもう少し新しい時代、今から一万二千年前の縄文時代の始まりから出発させました。縄文時代には結構人が生活し人骨も残っています。ただ、不思議なことに北海道の縄文人と、九州・沖縄の縄文人とがそっくり

ら出ました。特徴は、顔が長い、鼻の付け根が扁平。分かりやすく言うと鼻が低い、平べったい彫りの浅い顔です。そして、身長が高い。男性で一六二〜一六三cm、女性で一五〇cmです。因みに、縄文時代人の男性は一五八cmが平均です。弥生時代にこの北部九州・山口だけが一六〇cmを超えます。ただ、埋葬の形態や施設には若干違いがあり、土井ヶ浜では穴を掘って埋めるだけの普通の墳墓か、石を四角形に囲った石棺かに埋めます。北部九州の、吉野ヶ里遺跡に代表される佐賀平野や福岡平野の場合は甕棺を作りま

りなのです。ほとんど形質に差がありません。この縄文人がどこから来たのかは分かっています。分らない理由は二つあります。北海道の縄文人と九州・沖縄の縄文人の特徴に地域差がないことが一つ。もう一つは、中国での縄文時代に相当する時期の人骨が日本の縄文時代人と全く異なっていることです。北から来たのか南から来たのか分からないのです。弥生時代になり人の顔・形に多様性が出て面白くなります。現代日本人にまで繋がる顔・形の特徴や地域差が、その頃形作られたわけです。弥生時代の始まりは今から約二三〇〇年前。秦の始皇帝が中国全土を統一した時代です。最近、始皇帝の中国統一と日本人の顔・形に地域差が出たこととは無関係ではない、というところが分かってきました。

2. 弥生人の地域差

弥生人には顔・形に地域差があります。三つの地域に区分できます。第一は北部九州・山口タイプです。その人骨が福岡県とか佐賀県、山口県の土井ヶ浜などか

す。第二が長崎県などの西北九州タイプの弥生人です。彼らの特徴は、まず顔が短く丸顔です。横幅がよく張っています。眉上弓が出て鼻が高い。彫りの深い顔です。身長は低く男でも一五八cmです。風習的な抜歯をしています。抜歯すると人相が変わりますので、一人前の大人になったことが共同体の成員に認知されるのです。「抜歯によって初めて成人となり結婚もできる」という厳しい社会でした。第三のタイプが南九州・南西諸島の弥生人です。彼らは顔が小さく短頭です。上から見たら円に近い。頭の長さの最大値を計って横幅も計って、横幅を長さで割り、一〇〇を掛けて指数値を出します。それが八十を超えると大体丸くなってきます。南九州・南西諸島の人は満月みたいに丸い。この地域だけの特徴です。現代人は短頭化して頭が丸くなっています。世界的な現象です。同じ特徴が二〇〇〇年前の南九州・南西諸島の人に見られるわけです。

3. 弥生人の地域差の由来

北部九州・山口タイプと西北九州タイプ、そして、南九州・南西諸島のタイプ、この三つの地域の弥生人には、先に述べました体・習俗等の特徴に違いがありました。なぜ弥生人の間に地域差が出るのかを考えていくと、次第に現代日本人のルーツが見えてきます。

西北九州の弥生人の特徴は、顔が短い、鼻が高い、彫りが深い、そして、身長が低い。これらは縄文人の特徴でもありません。それが長崎県の西北九州の弥生人を縄文人の直系の子孫と考える理由です。

弥生時代になってどこからか人が流入してきた、元居た人達を追い出して入れ替わったというわけではありません。

土井ヶ浜や吉野ヶ里などの北部九州の弥生人は何者でしょう。彼らには縄文人の特徴が見えません。当初学会の主流的意見にならなかった、元九州大学医学部教授の金関丈夫氏の一九六〇年代の「大陸から弥生文化をもたらした渡来人ではないか」説が、いま再認識されています。私もこの問題に決着をつけるべく、弥生時代の開始直前か漢代くらいの人骨を調べに中国へ渡りました。色々歩いて、山東省の田舎町臨淄（戦国時代の斉の国都）に足を踏み入れました。そこに三〇〇体の人骨が保管されていました。半分が漢代、残りが戦国時代の人骨です。見た瞬間にそっくりだと分かりました。土井ヶ浜や吉野ヶ里の弥生人のルーツは大陸にあるということも。その後、黄河と揚子江の源流、チベットの北東にある青海省に行きました。ここの青銅器

時代、今から三〇〇年前の人骨を三〇〇体ほど調査しました。やはりそっくりです。渡来系と呼ばれる土井ヶ浜とか吉野ヶ里の弥生人のルーツは、黄河の上流域にあり七〇〇年くらい前に黄河の流れに沿って中原、山東省へと移動しそこで混血が起きたのではないかと。私にはその延長線上に日本列島が見えます。中国の戦国時代の戦乱を嫌って平和な地をめざした人達がいたに違いない。縄文時代から入っていた情報に基づいて動いた可能性を考えます。

それから南九州・南西諸島の弥生人です。彼らは顔が小さくて身長もかなり小さい、そして頭は上からみると殆ど丸に近い。実はこの人たちは実はルーツは大陸にあると私は考えます。彼らにそっくりな人骨を山東省で見つけました。やはり頭は丸いのです。彼らのルーツがよそにあるとすれば、この丸い頭（短頭）も理解ができそうです。ただ、ルーツが大陸にあると言え、台湾から南西諸島を北上して来たのではないかとということも考えなくてはならないかと。調査した結果そういうルーツはなさそうです。福建、台湾から南西諸島を北上する人の移動は考えられませんか。

話が横道にそれますが、研究を始めたとき究極の目標は日本人のルーツを明らかにすることと心に決めていました。未来を予測するという目標がそれに加わりました。それは、今の子供や学生の顔・形に激変が起きていることに気付いたからです。人間は顔・形を変えてきました。日本人も縄文時代以来ずっと変化してき

ました。まず顔が長くなっています。俳優さんの顔も長くなり鼻が高くなりました。手足が長くなりプロポーションがよくなりました。現代人はだんだん美しくなっています。でも未来を予測した場合、私は不安です。これを帳消しにするぐらいの非常に悪い兆候が出ているからです。顎が尖ってきています。その原因は咀嚼能力の弱体化にあります。今の子供たちは噛まない、軟らかい物しか食べない。そうすると、この成長期に供給されたカルシウムは顎につきまします。顎が前へ伸びています。前へ伸びると歯の噛み合わせが悪くなります。歯並びが乱れた人達が多くなりました。原因はもう一つあって、子供の時の甘いものの食べ過ぎによる乳歯の早期の脱落です。永久歯は乳歯がどこにあるかが分かって始めて出てきます。乳歯がナビゲーターの役割をしています。その乳歯がないものだから永久歯は乱杭状態で生えます。足も大きくなっていきます。歩きついていると、成長期に供給されたカルシウムは骨が厚くなる方向に使われます。しかし、今の子供たちは生まれた時から車に乗っています。それで、カルシウムが足の厚くなる方向ではなくて伸びる方向に使われてしま

うのです。

口腔領域が弱体化すると、胃や小腸などの消化器系が働きます。体力をつけるのには十年かかります。落ちるのは早くて多分あつという間に平均寿命は落ちていきます。一番恐れるのは子供が親より早く死ぬ時代が来ることです。大人の役目としてこれは絶対防がねばなりません。

。硬い物を食べて咀嚼能力を取り戻す、食事時間を長くとり、ゆっくり食べましょう。もう一つは足です、これは教育でしか救い道がないんです。学校教育の中の体育が大切です。数学、国語、英語の授業時間ばかり増やして体育を削ったら、皆バタバタ倒れていきます。私は体育の先生にお願いして生徒達にこう言っています。「あなたたちは学校を卒業したら体育をしなくなり、体を保つことが難しくなる、これからは自分のライフスタイル・ライフサイクルに合わせて、スポーツを生活の中に取り入れなさい」と。私は、農村から体が崩れていくと心配しています、歩かないから。東京へ行ったら皆さん歩きます。一時間も二時間も地下鉄乗り継いで歩きます。あつちの地下鉄、こつちの地下鉄と。ところが農村では、自分の家から田んぼへ行くまで車で行くんです。歩かないのです、バスも通ってません、田んぼに入ったら耕耘機で仕事をし、済んだらまた車に乗り替えて家へ帰ります、タバコを買ったり酒を買うのに二〇メートル先まで車で行く。いつ歩くのかいつ体を鍛えるのか。危機が農村から起きてきそうで心配です。

4. スライドによる説明

以下はスライドを見ながらの説明です。

。北部九州・山口・佐賀・福岡は土井ヶ浜に代表される弥生人。顔が長く彫りが浅くルーツが大陸にある人たちようです。

。それから長崎県の弥生人ですね、西北九州では、顔が短く鼻が高く彫りが

ました。まず顔が長くなっています。俳優さんの顔も長くなり鼻が高くなりました。手足が長くなりプロポーションがよくなりました。現代人はだんだん美しくなっています。でも未来を予測した場合、私は不安です。これを帳消しにするぐらいの非常に悪い兆候が出ているからです。顎が尖ってきています。その原因は咀嚼能力の弱体化にあります。今の子供たちは噛まない、軟らかい物しか食べない。そうすると、この成長期に供給されたカルシウムは顎につきまします。顎が前へ伸びています。前へ伸びると歯の噛み合わせが悪くなります。歯並びが乱れた人達が多くなりました。原因はもう一つあって、子供の時の甘いものの食べ過ぎによる乳歯の早期の脱落です。永久歯は乳歯がどこにあるかが分かって始めて出てきます。乳歯がナビゲーターの役割をしています。その乳歯がないものだから永久歯は乱杭状態で生えます。足も大きくなっていきます。歩きついていると、成長期に供給されたカルシウムは骨が厚くなる方向に使われます。しかし、今の子供たちは生まれた時から車に乗っています。それで、カルシウムが足の厚くなる方向ではなくて伸びる方向に使われてしま

深く身長が低い人。長崎県には縄文人の直系の子孫にあたる人たちが住んでいました。このように膝とか肘を曲げた埋葬を屈葬といいます。これは縄文時代の埋葬のやり方です。浜郷遺跡など長崎県の弥生人は、顔・形が縄文人とそっくりだというだけでなく、埋葬の仕方でも縄文人と同じです。長崎には産出されず南西諸島でしかとれないイモ貝を使った腕輪をしています。二〇〇年前に沖縄の人たちは、長崎県のことでも五島列島のことでも知っていて交易していたのです。

東松浦郡呼子町の大友遺跡の写真です。ここは、もし福岡平野や佐賀平野の弥生人のルーツが大陸にあるとしたら、どんなルートで入ってきたかと考えて調査したものです。実にぞんざいな埋葬のされ方をされているように思えます。石の枕があるだけ。これは石棺、これは甕棺ですが、こういう新しい文化、新しい埋葬のやり方が入ってきています。しかし、この顔・形を調べてみるとやはり縄文的な人たちです。これは吉野ヶ里遺跡です。佐賀県は花崗岩の霽爛土壌で酸性が強いです。だから人骨は残りません。人骨は日本列島の場合は酸性が強いので保存がよくありません。残るところは貝塚と砂丘と洞穴しかありません。ところが入れ物を作った中空になっていると、酸性土壌が中に入らず人骨に触れなければ骨も残ります。

なんで甕棺のようなものを作ったのか、作らなければならなかったのか。

私は遺体をとっておこうとした入れ物ではないか。甕はとっておくためのものですよ。甕に入れたということはやはり体をとっておこうとしたのではないか。なぜかという生き返ったときに体がないと困ります、再生の思想というのがあったかもしれません。一つの丘陵から二〇〇〇個、三〇〇〇個と出てくるのです。

佐賀県の甕棺の人骨です。これは腕輪を二四枚つけています。これは女王です、シャーマンだと思います。この人の甕棺の隣から一五、六才の女の子が一八枚の腕輪をつけて出てきました。紀元一世紀くらいのです。DNAを抽出して鑑定しました。これが日本ではじめて古人骨からDNAを抽出した例です。三年かけて血縁関係を調べてみましたが、結果は赤の他人であることが分かりました。

これはゴホウラという貝でこれはイモ貝という貝なんです。これで腕輪を作るんです。これから腕輪を作るといふのはそんなに難しくない、私の発想でも輪切りにしたらできるなあと思うんですけれども、これを縦に切って腕輪を作ります。輪切りにするというのはすごい発想だと思えます。それから、この貝から腕輪を作るといふ発想を誰が生み出したか、私は不思議で仕方がありません。なぜ彼らは腕輪にこだわったのか。これは私の考えですが、中国大陸の玉(ぎょく)を真似たと思っ

作るとか装身具を作るんですが、日本にはありません。玉を知っていた彼らは玉に替わるものを手に入れたんです。そう考えると、形質的なものも含めて全部大陸とリンクしてしまう、すごく分かりやすいのです。

これは指輪なんです。マガキ貝という貝で作っています。指輪を持っているのは、神戸の新方遺跡と土井ヶ浜遺跡と五島列島の遺跡と沖縄の遺跡ぐらいいしかありません。貝を使うのは土井ヶ浜と五島列島と沖縄です。これは、二〇〇〇年経っているから表面はザラついています、純白で、すごくきれいだったと思います。これは土井ヶ浜から出てきている装身具です。服に縫い付けていたか、この穴に紐を通してペンダントか何かにしていたと思います。青海省の遺跡の遺物の中にそっくりのものを去年見つけました。これはゴホウラ貝で作った土井ヶ浜型の腕輪です。実に奇麗です。

人骨を比較してみましよう。お確かめください。右側が長崎県の弥生人、左側が佐賀平野から出ている弥生人です。顔が違います。長崎県の弥生人は鼻の付け根から顎の先端までが短く、眉のところの隆起が強く鼻が高いのでここに皺が寄っています。すごく精悍です。鼻の作りなどヨーロッパ人と同じです。一方、佐賀平野の弥生人は鼻の付け根から顎までが長く、眉のところの隆起がなくて鼻が低いのでここがベツチャンコです。顔が延びています。少々間延びしています。顔付が全然違

いますね。もう一つは吉野ヶ里の人骨です。顎が少し斜めになり尖ってきてますが、顎の部分は絶対尖ってません。ところが、縄文系の弥生人は顎が水平です。これくらい違いがあります。これはですね、これは人種が違うと言いつてもよいほどです。これは土井ヶ浜の人です、ちよつと顔の幅がスリムになります。山口県、特に豊北町にはこの顔にそっくりの人がいます。これが南九州・南西諸島の弥生人です、顔が全体的に小さいんです。だけど女性ではありません、子供でもありません、成人男性です。

山東省の話をちよつとします。山東半島があります。ここが齊の国の都の臨淄です。これが山東省の漢代の人骨です。ここからこまでが長く鼻の部分扁平です。土井ヶ浜の弥生人に形態的によく似ています。私は頭蓋を七十カ所ぐら計測し、多変量解析をやりました。ここに一つのクラスターができます。これは縄文人と縄文系弥生人のクラスターです。集団が集まります。このあたりに土井ヶ浜弥生人や吉野ヶ里弥生人の、いわゆる渡来系と言われる弥生人が集まっています。ここに南九州・南西諸島の弥生人が集まっています。そしてここが臨淄の漢代の人骨なんです。統計学的に処理しますと土井ヶ浜弥生人と区別がつかないのです。

もう一つ、これは青銅器時代の人骨です。これは青海省の人骨です。李家山というところの人骨ですが、ここか

らここまでの長さが長く、鼻根部も扁平です。顔が全体的にフラットなんです。ところが、顔のプロポーションがよく整っています。私は、これは土井ヶ浜、吉野ヶ里の弥生人の原形ではないかと考えています。鼻は低いけど美男子というのがこういうタイプです。今の青海省にチベット系の寺院がありまして、タール寺というお寺がありますが、あそこのお坊さんの顔を見てみると何となく似ています、こういう顔に。

5. まとめ

それで全体をまとめてみましょう。これが青海省です。これは黄河です。黄河

は青海省から出発します。揚子江の源流も青海省にあります。青銅器時代の人骨、紀元前一〇〇〇年の人骨です。この人たちの中から、黄河の流れにそって、例えば河南省にありますが、殷墟というのがありますが、こういうところへ移動して、最後に山東省の臨淄みたいなところに住み着いてきます。もともと山東省は戦国時代最も栄えた国ですから、多くの人がちが周辺から入ってきたはずで、もう少し多様性があるのではないかと思っています。これを図式化しますと、こういうふうにならなから中流、下流へとこういうふうに移り住んで、挙句、これらが土井ヶ浜・北部九州に流入してきたのではないでしようか。これが私の描く日本人のルーツ

です。今日は、未来とか弥生時代の話があつち飛んだりこつち飛んだりしましたけど、以上が主に私の言いたかったことです。骨は恐怖の対象に使われていますが、私はこれが不満です。骨というのはいろいろな情報を教えてくれます。日本人の歴史を伝えてくれます。これから我々はどう生きていったらいいのかも教えてくれます。骨を大切にしておし存在だということをお忘れなく。

(文責 添田)

総会に参加して

井上 恵

(人文第十二回卒)

去る八月十二日、残暑の厳しい朝、第六回鴻文会総会が山口大学学生会館にて開催されました。卒業して九年が経ち、大学ともすっかり縁遠くなっておりまして、日頃ご無沙汰ばかりしている恩師との再会を楽しみに、初めて参加致しました。

今回は、鴻文会・鴻理会が設立して二十周年という節目にあたり、両会合同の催しとして、公開記念講演会が開催され

ました。始めに、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下先生が人骨について公演され、あまり身近なテーマではありませんが分かり易く説明して頂き、大変興味深く拝聴致しました。続いて広中学長が「山口大学のこれから」と題して公演されたのですが、大学の法人化やトップ三十の問題等、国立大学も厳しい立場にあるようです。

総会終了後、鴻文会・鴻理会合同の懇親会が第二学生食堂で行われたのですが、食堂も奇麗に改装され「きらら」と名称まで付けられていました。懇親会では、在学中にはお目にかかる事のなかった先生や先輩方とも交流を深める事ができ、大変有意義な楽しい時間を持つことができました。夜は、それぞれの研究室に別

「第28回鴻文会役員会と第2回事業運営委員会との合同の委員会」報告

大野会長のご挨拶にもある通り、鴻文会運営の改善・活性化をはかって「事業運営委員会」(新旧役員有志で構成)を立ちあげ、去る平成十三年十月十二日に第一回事業運営委員会を開催して種々協議いたしました。それを受けて、第二十八回の鴻文会役員会と第二回事業運営委員会の合同会合を十一月二十二日に開催し、事業運営委員会から出された鴻文会の運営に関わる提案を下記のように承認し実行に移すことになりました。

(1) 山口大学後援財団設立募金事業、山口大学後援財団事務所の開設について

。山口大学本部事務局総務課の岡村氏も同席の上で協議を行った。

。各同窓会への、「上記財団が、特定公益増進法人として認められ、寄付者に対する免税措置が適用されるまでの間(通常、設立後三年)の、財団の運用資金への支援として、毎年十四万円程度のご寄付(同窓会連合全体で約二〇〇万円)をお願いしたい」旨の依頼について、協議の結果これを了承。

この運用資金としては、別途学内の教官、学部後援会、発起人等の方々に

もご寄付をお願いしているとのこと。
山口大学後援財団の事務所を、現在同窓会連合会が間借りしている沖田ビル二階の鴻文会・鴻理会の連絡事務所に同居させていただけないかとの打診があった。財団設立のための手続きとして、文部科学省に提出する「財団法人山口大学後援財団寄附行為(案)」に事務所名の明示と実態が必要であり、この際、現在の事務所が大学のすぐ近くにあり運用資金経費の節減の観点からも是非にという依頼であった。この件について協議した。

(2) 賛助会員の制度について

鴻文会の活動のための資金は会員の終身会費(当初の五千円、四年前からの一万円)と毎年度の新入会員の終身会費で維持されている。現状はと言えば、そのほとんどが年度初めの新入会員の終身会費のみに依存してきている状態である。そこへ上記の問題(1)が持ち上がり、下記の名簿管理、会報の発行、ホームページの書き替えなど活動・運営の充実と改善・活性化をめざすことに伴い(あくまでもこちらが出発点)、厳しい会計状況になることが予想される。振替用紙を会報発想の際に同封して一口千円(なるべく一口以上)の寄付をお願いしたい。

(3) 名簿作成

名簿発行は諸般の事情(プライバシーの保護等)から以後行わないこととする。名簿自体は、会報発送、会員

への諸連絡などに際して不可欠なものであり、同窓会としての住所管理はこれまで通り続ける。
名簿管理の規則(名簿の公表基準)を定めて支部そのほかの利用に供する。

会報に着払いのハガキを印刷して、住所・電話番号・勤務先の変更等がある場合や、会報に載せる「転居先不明者一覧」に目を通してご存じおりの会員情報をお知らせいただく場合などに使っていただき、これにより、毎年会員住所等の確認を行って現行以上に正確を期する。

(4) 会報「鴻文」の発行

会報は会員相互のつながりの場を提供するなど同窓会活動にとって重要である。現在二十号まで発行している会報「鴻文」の毎年発行体制はこれを維持し、内容面の一層の充実をはかる。

会報で、名簿の発行中止の事情を説明するとともに、名簿管理の規則を公表する。

今年度の会報は、小野美典氏と学内幹事の磯部氏に会報作成を担当してもらい、ほかに大学院生に作成スタッフに加わってもらい、斬新な企画を立案・工夫してもらって平川ネタなど若者向きのものを目指してみる。大学院生には若干の謝礼を図書券などの形で差し上げる。

(5) ホームページの書き替え

ホームページは立ち上げて以来一度も内容が変更されていない。現在公

開しているホームページは速やかに閉鎖して、新たに開設し直す。これからは随時に掲示板の内容を変更するように努める。

そのためのスタッフを鴻文会外の適当な方1名に小野美典委員が仲立ちとなつて依頼する。掲示板の原稿は、小野氏のほかに担当する委員若干名を中心作成する。鴻文会外のスタッフには適当な謝礼を差し上げる。

以後の掲示板の管理、記事の更新などは大学院生と鴻文会委員数名で行う。

利用サーバーは有料の契約にし、鴻文会にホームページ専用の銀行口座を設ける。

(6) その他

支部活動の活性化
同窓会活動の活性化をはかるために次のように活動していく。

1. 近隣地区においては自治体単位で支部とし、遠隔地においては県単位の支部として、会員相互の親睦、融和、相互支援、情報交換等の場とする。

2. 各支部において複数の世話人を選出する。世話人は時宜に応じて会合を開催し、そのための会場の設定等に寄与する。

3. 世話人の一人は、本部の幹事として、四年に一度の総会運営の業務にあたるものとする。

【会員各位へのお知らせとお願い】

以上が臨時の役員会のご報告でございます。ひとえにマンネリ化しつつある同窓会活動の活性化をはかるための「改革」とご理解いただき、なにとぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

上記(1)～(6)に関わる改善にはご寄付に関わることが多く、出費多端な折りから誠に申し上げにくうございますが、お願いが四件ございます。

※ (1)に関して。現在皆様のご厚志のお陰で、山口大学支援財団設立のための資金が下記のように2億円を超える金額が集まっております。大学の方では、もっか支援財団設立のための申請の準備にかかっていると

ろですが、設立後の財団の安定的な運営を考え、なお一層の皆様のご協力をお願い申し上げます。平成十三年十一月三十日に開催された第七回の同窓会連合会でも、さ

ような呼びかけを再度会員各位にすることにいたしました。下記は現在の募金状況でございます。お目通しの上、事情をご賢察くださいまして、

よろしくお願ひ申し上げる次第です。同封の郵便振替と銀行振込みの併用紙(加入者・山口大学同窓会連合会)をお使いくださり、「一口五千円、できるだけ二口以上」のご寄付

をお願い申し上げます。

山口大学支援財団設立募金事業会計報告

平成13年11月30日現在
単位 円

事 項	収 入	支 出	残 額
山口大学支援財団設置準備会関係 (預金利息を含む)	102,816,984		
創立50周年記念事業費		22,913,903	
印刷代等		33,495	79,869,586
山口大学同窓会連合会関係 (預金利息を含む)	154,974,889		
内 訳			
鴻 文 会 407名 4,681,500			
時 雍 会 1,793名 17,212,000			
鳳 陽 会 1,546名 42,599,000			
鴻 理 会 551名 6,494,000			
霜 仁 会 1,329名 25,165,000			
常盤工業会 2,282名 48,098,000			
農 会 482名 4,881,000			
双 樹 会 430名 3,911,000			
名誉教授 67名 1,860,000			
計 8,887名 154,901,500			
同窓会連合会の募金活動経費		21,364,933	133,609,956
内 訳			
印刷製本費 6,718,436			
郵便料 9,692,377			
人件費 2,837,458			
光熱水料・家賃 946,499			
振込み手数料他 1,170,163			
合 計	257,791,873	44,312,331	213,479,542

※ (2)の賛助会員の制度につきまして。この趣旨にご賛同いただけるようでしたら、同封いたしました郵便振替用紙(加入者：鴻文会)をご利用くださって、「1口1000円、できれば1口以上」のご寄付をお願い申し上げます。

※ (3)に伴い、下記の名簿管理の規則(名簿の公表基準)を定めました。名簿利用のご希望がございましたら、鴻文会連絡事務所までご連絡ください。

会 員 名 簿 利 用 規 則

1. 会員名簿の更新(新規入会・異動に伴う)と保管は事務局で行う。
2. 会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
3. 会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができる。営利を目的とした利用は禁止する。
4. 会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
5. 会員名簿の開示申請者名簿(利用者名簿)を作成し事務局で保管する。

※ (3)に関連して、会員住所等の確認を毎年行いたいと存じます。ある意味では4年一度の名簿発行のスタイルより、住所管理に関してはより正確な管理が可能になる面もございます。本会報「鴻文21号」に同封しておりますハガキを使って、所定の項目にご記入の上ご投函ください。

場を作り出していきたくて考えています。最後に、ほぼ一年間の生涯学習事業を通じて痛感したことを、少し横道に逸れませんが、書き添えておきたいと思います。

この思いはおそらく、講義に協力して下さった先生方をはじめ、大学人のすべてに共通する思いのはずです。それは、大学の社会における使命は充分理解できるとしても、大学人は果たしてそうした要望に応えるだけの環境にあるだろうかという事です。大学を外から見ると、大学の教師は、授業も少なく、時間も自由に好きな研究をしていけばよい、それで社会的な評価も高く、なんと優雅な職業か、と思われる向きもあるかもしれませんが、実態は決してそうではありません。講義の準備や講義、そして学生指導、さらに昨今は大学運営に関する会議や雑用が山ほど降りかかってきますし、研究に必要な研究費を受けるためには研究時間を割いて書類作りをしなければならぬという、なんとも皮肉な笑えない状況にあります。研究に必要な時間を充分保証されて、十分に研究に打ち込んでみたいという思いは大学人の誰もがもっているひとつの憧れでさえあるのです。最近よく、研究は二の次でよい、大学は教育機関である、という声も耳にしますが、学生が事柄の本質的な考え方や研究の方法を学ぶことのできるのとはそうした大学人の余裕のある研究の中からであるということも、また確かなことなので

雑感

山縣 乙水

(文理第十回卒)

勤労感謝の日は、深い霧を潜り抜けてやってきました。霧は秋の季語として人口によく膾炙され、秋の代表的風物にも枚挙されていますが、わが日常の生活空間においては、むしろ冬の暖かい朝に多く発生します。

春山の霧に惑へる鶯も吾にまさりて
物思はめや(『万葉集』卷十)
朝霧の八重山越えて霍公鳥卵の花辺
から鳴きて越え来ぬ

(『万葉集』卷十)
沖つ風いたく吹きせば吾妹子が嘆き
の霧に飽かましもを

このように和歌に登場してくる古の霧は、季節の枠が取り払われた春夏秋冬丸ごとの自然現象でした。因みに右の三首の「霧」の季節についていえば、「春山の霧」は、文字通り「春霧」であり、「朝霧」は後出の「霍公鳥」や「卵の花」から「夏霧」であると判断できます。「沖つ風」の歌に出てくる「嘆きの霧」は、視覚的には寒風に白く舞い飛ぶ呼吸であり、心中の嘆きもたらした吐息そのもので、季節感からすると冬霧と見なすのが理解に簡便でしょう。

ところで、こうした和歌に登場する風物も、「古今和歌集」の関門を通過した

あたりから部立てに季節感が先行して、和歌に読み込まれる風物を季節感表象の素材と見なす観念の固定化が浸透してきたと思われまます。

十一世紀初期の『和漢朗詠集』には、「霞」が春の題に、「霧」が秋の題として目録に取り上げられています。そして、その一世紀後の『堀河院御時百首和歌』の頃に、「霞」が春に「霧」が秋の題として用いられることが定着したといわれています。

朝来、季節を取り違えかねない景観と日差しです。遠景はすっかり霞にけぶり、日脚はその速度を忘れさせて夏の先触れかとも錯覚させます。勤労感謝の日が場違いな席に顔を覗かせた感じさえしてきました。

私の記憶の中の十一月二十三日は新嘗祭が始まりました。今日までもしこの呼称が生きて延びていたとしたら、眼前の風光は一段と時期を違えて、いま以上にすさまじきものに感じられたに違いありません。なぜなら、いま目の前に展開している景観の裡に「新嘗祭」の三文字が描き出してくれる収穫や秋を探そうとしても、いささか無理に感じられるほどに春めいた陽気です。

季節感はその埒の堅固なるをもって、活用の妙を際立たせているともいえます。俳句における季語などは、その典型であると同時に、俳諧から俳句への脱皮過程の要因でもあり内発力であったと思われまます。

万葉人以来、わが国では四季折々が示現する美しさに触発された情感を、季節

感に結び付けて言葉で描き出してきました。季節の推移に従って並べられ収録されている和歌集の歌などは、その典型といえましよう。そこでは、自然界のさまざまな風物が、それぞれの季節感を表象する媒体として、約束事や社会通念めいた役割を担って機能してきました。そしてその役割こそが歌の作り手(詠み手)と読者や聞き手の双方向を繋ぐパイプ役をも果たしてきました。

十一月二十三日が勤労感謝の日に生まれ変わって、随分と時間がたちました。その間というよりも寧ろ、年を追うに従って、「勤労感謝の日」そのものの語感が私の知覚の内部で妙に落ち着かないものになってきました。

「国民の祝日の一つ。十一月二十三日。勤労を尊び生産を祝い、国民が互いに感謝しあう日とするもの。」

(小学館『日本国語大辞典』)
勤労精神の大切さは言を俟ちません。問題は「生産を祝い」以下の文言の理解です。「生産を祝い」は、生産活動という人間の行為そのものの素晴らしさを顕彰するのか、それとも至極平易に、五穀豊穡を祝うのか。「国民が互いに感謝しあう」対象は、自らの日常生活が数限りない人々によって支えられている事実に対して、相互に感謝し合うのか、あるいは、健康や職場などといった勤労の要件を、自らのうちに具備し得ていることへの感謝なのか。

昼下がり、季節を取り違えた陽気に誘われて庭に出てみました。ピンクのぼんぼん咲きの菊は脱色して白くなり、盛り

の時には決して姿を見せなかつた芯の黄色を目立たせているかと思えば、白菊は衰えた花弁の縁を薄い臙脂色に染めていす。黄菊は茶色に変色し花びらをすつかり縮ませています。裸になった柿の木や紅葉の赤などのそうした秋の色合いが、霞にけぶる遠景を背に、場違いな顔をして風にそよいでいました。正しい呼称を知らないままに、我が家で勝手にタカサゴユリと呼んでいる野生の百合が、寒気の所為でしょうか花弁の背中側に臙脂がかつた暗緑色の線を描きながら、夏が終わり秋が通り過ぎて、冬を迎えた今も健気に花を咲かせています。

もう二十年にもなるでしょうか、種子が風に吹飛ばされて来たか小鳥が運んで来たのか、庭の梅の木の下に件の百合合が咲きました。当初は切花にして花瓶に生けていましたが、年ごとに球根が大きくなることとみえて茎が太くなり花の数も増えて、生けることができなくなったため放置しておいたところ、鞘がはじけ種子が飛散してその数が増えました。近年は年代物の数が増したために種子の飛散も激化して、春先になると庭のあちこちに、独特の細い葉が顔を覗かせます。特に玄関に続く敷石沿いに植えている竜の髭の中や玉石を敷いた個所には雲霞のごとく密生して取り除くのに時間がかかりました。野生は強かに己が遺伝子を次代に伝えています。

不精者ぞろいの我が家に生息している草花は、球根類を筆頭に多年草ばかりです。鶏頭などの一年生の草花は、自分で種子を落とし、自らの力で年ごとの

生涯を繰り返しています。放置された我が家の庭は実にスリルに富んでいます。去年までは確かに此処に咲いていたと思われる花が、春を過ぎても一向に顔を見せなくなつたかと思うと、思いがけない場所から予想もしなかつた植物の若葉が萌え出したりして、一年中結構新しい発見があります。

そのような次第ですから、先述の菊なども実に種々雑多な花を咲かせ、旺盛な繁殖力を誇るかのようにはさばっていません。とりわけ面白いのは自然交配した種子からの実生でしょうか、曖昧な色の花を咲かせたりする殆ど野性化したと思われるようなものもあります。

野性化とまではいきませんが、我が家ではカボチャもミニトマトも野生生えです。邸の北西の片隅に、台所の生ごみを埋める場所があります。夏場にはコンポストに入れる生ごみも腐敗の速度が鈍る冬場は嵩張ってコンポストに溢れるため、冬場の生ごみは直接土に返します。——春先にはいろいろな野菜が芽吹きます。その中から全く手のかからないと思われるものを選んで残します。

いつの年だったか、その場所に六本のミニトマトの苗を植えました。爾来、毎年熟れ落ちて果肉を腐らせた種子が、確実に何本も芽を出してきます。先にも述べましたように、生ごみを埋め込む場所です。野犬などが掘り返さないように深さ七十センチ位の穴を掘って、その中にごみを入れ土を被せる訳ですから、野菜の種子や地表に熟れ落ちたミニトマトの種子のかなりの数は、当然発芽条件とし

ては劣悪です。そうした恵まれない環境に抗って地表まで這い上がってきた苗だからでしょうか因太く生き抜いていきます。特に連作を嫌うといわれているトマトが野生生えになって以来、逆に病気がらしい様相を示しません。最初のは買ってきた苗でしたが、秋口以降果実が黄色に色づいた段階で、表皮の内側に白い斑点のようなものが透けて見え、熟れを待たず落ちていきました。

今年には三本のカボチャと五本のミニトマトと二株のサトイモの苗を仕立てました。収穫を終えたカボチャの蔓とサトイモの株、さらには三本のミニトマトの木は、目下もとの場所に埋め戻すためにビニール袋の中で、しっかりと乾燥しながらその時期を待っています。

今日も完熟した二十数個のミニトマトを収穫しました。五本あつたものが、目下二本に数を減じてはいるものの、茎も太く草丈は三メートルを優に越え、季節柄葉を殆ど散り落として立っている姿は、実の赤色を加えて柿の木を髣髴させます。いずれにせよ、野生は逞しくそして確実に己が命を次代に譲り渡しています。子育ての一端を担う教育現場の緑を食み、のうのうと定年を迎えた上に、更にまたその周辺に身を置いている私は、いったい何を遺し得たか。

駄文の先が見えた安堵感から庭に出てみると、空には陰暦十月九日の朧な半月が、やや西に傾きながら黄色く霞んでいました。

若木が成木となる如く…

畑地 正憲

九州男児を自負？していた自分が、関門海峡を越えて職を奉じることは正直言つて想定できなかった。思い道理にならないのが世の常とは、よく言つたものである。縁あって、山口大学文学部文学科東洋史学担当教官として赴任したのは、昭和四十九年（一九七四）十月であり、晩学の私は三十五才であつた。当時、東洋史は担当教官一人の半講座制であつた。助手から助教授への任用は、破格ではあつたようだが、一講座をお預かりすることには不安もあつた。私の不安以上に、研究室に所属する学生諸君の戸惑いは大きかつたと推察する。幸いに、前任の小畑龍雄教授とは学会で面識があつたので、懇切丁寧なバトンタッチを頂き、先任の教官の方々及び事務の皆さんの親情も深く、不安は杞憂となつていった。

研究に裏付けされた講義を行うために、研究・教育に所謂「一所懸命」であつた。山大東洋史で共に学んだ学生は全国何処に行つても通用する人材であれど、肩に力を入れていた感があつたが、「よく学び、よく遊べ」の言葉どおり、学生諸君もよく頑張つていた。山口で飲んで、議論しながら湯田まで歩いて、また飲み直した。湯田宿舎の拙宅でも夜を徹して議論して痛飲し、翌朝、家内が近所の人に詫びを入れているのに感謝しながら出勤した。先生は二日酔いでひよつとしたり…

と言う学生の淡い期待をいつも打ち砕いていたと思う。当時の私は、酒飲んで勉強できんものは本当に勉強しろらんとというのが口癖であった。知力≡体力を主張できるほど私も若かった。

文理改組で人文学部が完成年度となる昭和五十六年(一九八一)に、設置審の審査に基づき教授に昇任した。この年の初夏、恩師の日野開三郎先生がひょっこり温泉に浸りに来た。研究上の諸問題や学生指導のことなど夜遅くまでご指導頂戴した。翌朝、お見送りする時、「君も教授になるといろいろあると思うが、しっかり頑張りたまえ。奥さんを大切に」と、低いがはっきりと言われた。先生はこの一言を伝えるために温泉に来たのだと感謝した。ただ教授になるんじゃない、教授になると言うことはいろいろな責任を負うことだと理解し、山口大学人文学部に腰を据える覚悟も固めた。

昭和五十八年(一九八三)には、長期在外研究として米国ハーバード大学、英国ケンブリッジ大学で研究する期間を頂戴した。米国ではコロンビア大学、プリンストン大学、スタンフォード大学などでも研究資料の閲覧および研究者との交流もできた。夏季休暇にはロスからボストンまで一月かけた大陸横断自動車旅行という貴重な経験もした。英国では、東イロンド会社関係の史料や大英博物館所蔵の敦煌文書の実物を見学するなどの念願が叶った。研究・教育の進化・拡大を図るべき時期に、在外研究で見聞・視野を広げる機会が与えられたことは幸運であった。

この頃から、演習で使用するテキストとして、難解ではあるが唐宋時代(七、十三世紀)の中国経済・社会史の諸問題の根幹となる塩の専売に関する『宋史・食貨志・塩法』を選定し、グループ・スタディーを実施することとした。このテキストによる演習は、平成十年(一九九六)に完了したが、約十五年間の学生との汗と涙と沈黙の学習の足跡は、十五冊のファイリングに保存されており、この整理・刊行が定年後の私の宿題として残されている。

平成五年(一九九三)十月、山口大学の大学改革推進のために設置された「教育研究体制の改善強化に関する特別委員会(第一委員会)」の専門委員会(教育課程検討)の委員長に選出された。この大学改革によって、平成八年(一九九六)四月より山口大学教養部は廃止され、教養教育は全学出動体制による共通教育として変革することとなった。この第一委員会の専門委員長及び共通教育センター長としての業務は、私の研究ベースを混乱に陥れるものとは予想しなかった。研究と公務との同時進行ができるかと高を括っていた。五十半ばを過ぎた知力≡体力の衰えと、生来の不器用さ(だから目前の事を集中的に努力した)で二兎を追うことができない自分を見失っていた。生前の恩師(一九八九九年九月に鬼籍に入られた)から「そろそろ研究を締めたらどうか」という課題の解決を未だ実現していない。定年を迎えて、やっと目途が立ったにすぎない。これだけは早急に実現しないと、来世で恩師と酒も飲めないと思

思う昨今である。

定年を迎えるに当たって宿題も残っているが、大学に奉職して三十年余、大病を患う事もなく(常備薬が手放せなくなつたが、大病息災と前向きに考えよう)、大過なく第二の人生に歩き出せそうである。この間、山口大学で出会った学生諸君は、親となり、職場の指導者となつたものも多い。彼等からは年に一度の近況を頂戴した。諸君は私に素晴らしい宝を送ってくれた。また、職場の先輩、同僚、各学部の諸先生方、事務官の方々、地域の人々など多くの人々から暖かいご厚情とご鞭撻を頂戴した。感謝!感謝!

若木から成木の時期を過ごしたキャンパスに立つと、着任した頃の樹木の多くは両手で握り締めることができた。しかし、今は一抱えもある大木となり、樹木

最終講義のお知らせ

畑地正憲教授は、昭和四十九年にご赴任以来、人文学部で長年教鞭を執ってこられました。三月をもって定年でご退官なさいます。つきましては、最終講義が、左記の日程で行われます。卒業生で聴講希望の方にも公開いたします。ご来聴ください。

日時 平成十四年二月九日(土)
場所 山口大学学生会館
演題 「宋代史研究にたずさわって」

の中に校舎が埋もれるようになってい。落葉樹は、新芽の準備ができてから葉を落とす。天空に広がる毛細管のような梢には新しい息吹が満ち満ちている。この息吹を取り込んでキャンパスを飛び立ちたい。再見!再見!再見!

山口大学人文学部 公開講演

やまぐちサタデー・カレッジ

第十四回公開講演

の民族問題
講師 本学教授 尼川 創二

テーマ 中国とロシアの歴史から
とき 平成十三年十二月二十二日(土)
ところ 徳山市市民交流センター
演題 「中国の大運河と後期中華帝国」
講師 本学部助教授 滝野正二郎
演題 「ロシア革命とザカフカース

平成十三年度
やまぐちサタデー・カレッジ
会場 山口大学人文学部
日程・内容・担当講師

前期(五、七月)

現代文化コース 八回

「『星の王子さま』を翻訳で読む」

井上 三朗 教授

外国語学習コース(英語) 十五回

「映画で英語を楽しもう」

太田 聡 助教授

異文化交流コース 八回

「東西文化交流の諸相」

畑地 正憲 教授

後期(十、十二月)

外国語学習コース(中国語) 八回

「中国語中級読本」

——小品を味わう——

富平 美波 助教授

やまぐち学コース 八回

「山懸周南を読む」

豊澤 一 助教授

新任教官の紹介

変化と不変と

尾崎 千佳

(比較言語文化・講師)

平成十三年四月、言語文化学科比較言語文化講座に、講師として着任致しました。三月迄は大阪大学大学院博士後期課程に在学して居りましたが、十年余の学生生活を関西に送りましたが、出身は長崎市、山と坂に囲まれた手狭な空間が私の

原風景です。加えてモノとヒトに取り囲まれた青春時代を送ったせいのか、盆地と山は言い条、山口の自然は、私には豁然たる光景と映ります。環境や立場が一変した為の緊張感と、自らの狭隘が矯正されてゆくような伸びやかさと、両極の新感覚を楽しみつつも、瞬く間に過ぎ去った半年間であります。

日本古典文学、特に、中世末期から近世初頭にかかる、連歌・俳諧史を主な研究課題として居ります。国文学・古典文学と云うと雅なイメージを抱かれがちですが、この分野には未だ資料発掘・考証・認定・整理といった基礎作業が不可欠で、図書館や寺社旧家への調査旅行を週末毎に繰り返すのが半ば常態となっております。山口でも既に数度、貴重な古典籍に触れる機会に恵まれました。往時の姿のほぼそのままを留めている書物や短冊を前にした時、それらを端然と伝え継いで来た数多の人々の、精神の豊かさ勁さを思います。

地道な習練を要求する授業は、私の経験と努力の絶対的不足と相俟って、学生の皆さんに混乱を及ぼしているようで、試行錯誤は尽きません。人文科学系の学問に対する厳しい外圧の是非はともかく、文学研究の在り方自体に変化が求められていることは、教室の内外で日々実感させられるところです。大学で古典文学を講ずること、古典文学を研究してゆくことが、今とこれからにとってどのような意味を持ち得るのか。これらの問い掛けは、あらゆる意味に於いて駆け出しの私にとって、頗る重い荷物です。

文化や学問ということに限らず、停滞を排して刷新を図る為には莫大なエネルギーが必要とされ、また逆に変わらざるをえずに居続けることにも強靱な意志の力の集積がなければなりません。これを古人は「流行」と「不易」という言葉で表し、両様の価値基準を持つべきことを説きました。新しい場で自分の中の何が変わり、何が変わらずに残るのか、模索を続けたいと強く念じて居ます。若輩者ですが、どうぞ宜しく御願ひ申し上げます。

人文学部教官紹介

学部長(併) 田中 晉

人間学

Table listing faculty members across various departments: 国際コミュニケーション, 比較言語文化, 歴史文化, 教育学, etc.

○言語文化学科

平成12年度事業報告

1. 第25回役員会 (5月27日)
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (9月26日)
3. 「鴻文会会報第20号」発行 (12月22日)
4. 第26回役員会 (3月24日)
5. 山口大学同窓会連合会

平成12年度決算

収入総額 2,474,821 円 支出総額 2,153,099 円 残額 (次年度繰越金) 321,722 円

収 入 の 部

科 目	当初予算額	決 算 額	比 較 増 減	摘 要
繰越金	176,551	176,551	0	
会費収入	2,100,000	2,130,000	30,000	10,000円×213人
名簿収入	10,000	4,000	△6,000	2,000×2人
繰入金	0	0	0	
雑収入	200,000	164,270	△35,730	同窓会連合会家賃 (130,000円) 預金利子、その他
合 計	2,486,551	2,474,821	△11,730	

支 出 の 部

科 目	当初予算額	決 算 額	比 較 増 減	摘 要
会議費	100,000	61,576	△38,424	役員会、その他
印刷費	200,000	156,450	△43,550	会報印刷 (4,200部)、封筒印刷 (5,000枚)
郵送料	370,000	376,810	6,810	会報郵送料、葉書購入、通信連絡費
事務所運営費	800,000	750,400	△49,600	家賃390,000円 (32,500円×12)、人件費 330,400円、事務所経費30,000円 (電話、町 内会費)
事務費	100,000	12,170	△87,830	消耗品、その他
寄付金	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
慶弔費	40,000	20,000	△20,000	霜仁会、周南鴻南会祝金
積立金	600,000	600,000	0	特別会計へ繰入
予備費	176,551	75,693	△100,858	交通費、懇親会費、その他
合 計	2,486,551	2,153,099	△333,452	

特 別 会 計

科 目	11年度財産	12年度財産	比 較 増 減	摘 要
定額預金 (S.63年)	600,000	0	△600,000	満期解約
定額預金 (H.3年)	1,000,000	1,000,000	0	
定額預金 (H.12年)		809,000	809,000	定額預金 (S.63年) … 満期解約預け替え
定額預金 (H.12年)		600,000	600,000	一般会計から繰入
中期国債ファンド (H.10年、100万円) (H.11年、40万円)	1,403,407	1,409,153	5,746	H.13年3月30日現在
合 計	3,003,407	3,818,153	814,746	

平成13年度事業計画(案)

1. 第27回役員会(6月23日)
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(7月の予定)
3. 鴻文会総会(8月12日)
3. 「鴻文会会報第21号」発行(12月の予定)
4. 山口大学同窓会連合会
5. その他

平成13年度予算(案)

収入の部

科 目	13年度予算額	12年度予算額	比較増減	摘 要
繰越金	321,722	176,551	145,171	
会費収入	2,020,000	2,100,000	△80,000	10,000円×202人(13年度入学者数)
名簿収入	4,000	10,000	△6,000	2,000円×2部
繰入金	200,000	0	200,000	総会費の一部(特別会計から)
雑収入	160,000	200,000	△40,000	連合同窓会家賃、預金利子、その他
合 計	2,705,722	2,486,551	219,171	

支出の部

科 目	13年度予算額	12年度予算額	比較増減	摘 要
会議費	150,000	100,000	50,000	役員会、その他
印刷費	250,000	200,000	50,000	会報印刷(4,700部)
郵送料	400,000	370,000	30,000	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
事務所運営費	800,000	800,000	0	家賃、人件費、事務所経費(電気、水道、電話、町内会費)
事務費	100,000	100,000	0	会報発送などアルバイト謝金、消耗品、その他
寄付金	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
慶弔費	40,000	40,000	0	
積立金	0	600,000	△600,000	
総会費	700,000	0	700,000	
予備費	165,722	176,551	△10,829	
合 計	2,705,722	2,486,551	219,171	

特別会計

科 目	12年度財産	11年度財産	比較増減	摘 要
定額預金(H.3年)	1,000,000	1,000,000	0	H.13年7月満期
中期国債ファンド (H.10年・11年)	1,409,153	1,403,407	5,746	
定額預金(H.12年)	1,409,000	1,409,000	0	
定額預金(H.13年)	400,000	0	400,000	H.12年度一般会計積立金から繰入 (60万円)、20万円はH.13年度一般会計へ
合 計	4,218,153	3,812,407	405,746	

注：H.12年度の役員会では1,409,520円で中国ファンドを購入することを了承されたが、都合により定額預金に変更した。なお、1,000円未満の預け入れはできないので、端数の520円は一般会計の雑収入に加えた。

同窓会

国文科同窓会

室田 浩 然

今年度の国文科同窓会は、前年に引き続き下関の地で開催いたしました。昨年度は長府町の功山寺の料亭で桜見物を兼ねて「精進料理」をいただきましたが、その席で次回は「ふく」料理をとということに決めていたものです。

年度末に近い二月三日(土)に、下関市丸山町の料亭「下商會館ふく旅庵」を会場として、午後三時より小田会長の挨拶にはじまる総会を開会し、引き続き懇親会に移りました。出席者は次の通りです。

水本精一郎・関一雄・添田建治郎の三先生、そして小田稜亮会長(昭二十九)・岩重隆人(昭三十三)・野村清志(昭三十五)・高崎直哉(昭三十六)・酒井良夫(昭四十四)・武富勉(昭五十)・藤沢敏行(昭五十二)・矢野文和(平七)、それに室田浩然(昭二十八)の都合十二名。昨年度の記録の中に、「少数精鋭」の言葉がありました。今年度もこの傾向が続いています。西に偏した場所柄の故か、引き受け幹事の勧誘不足の故かと、思案いたしました。

た。三時間が忽ちに過ぎ、散会したのは六時半頃のことでした。今でも皆様の聲が耳朶に伝わってきます。御遠路を、そして御多忙の中を参加された先生方と会員の皆様様に熱くお礼申し上げます。なお、小野田市在住の河口正氏(昭二十九)より、金一封をいただきました。心からお礼申し上げます。

さて、人文学部には、近年国語・国文学関係の若い先生方が御来任されています。これからはこの同窓会にも是非参加していただき、これからの国語・国文学の方向、そして又中・高校における国語教育の在り方など、いろいろと御高説を承りたいものと希望しています。そして又、若い先生方と御一緒に若い会員の皆様も多数参加して欲しいと願っています。以上、来年度以降のお願いを記し、今年度の報告を擱きます。

(国文学・文理第一回卒)

英語学英米文学同窓会

太 田 聡

去る八月十二日、平成十三年度鴻文会総会、講演会、懇親会の後、英語学英米文学の同窓会をホテルニュータナカにて午後六時半から開きました。その模様を、当日司会を担当致しました関係で、僭越ながらご報告させていただきます(なお、当日の写真は寺田寛先生のホームページでもご覧いただけます)。

開催日がちょうどお盆の時期と重なったのが悪かったのか、参加者は現教官六名、元教官三名、卒業生十名、在学生二名と、ちょっと寂しいかに見えました。が、その分、お一人ずつの自己紹介、そして、思い出話や近況報告にたっぷり時間を使っていたことができ、実に充実した気分でした。

やはり、人生の諸先輩方をたてて年齢順にお話しいただこうとマイクをお返しすると、「年寄り扱いされた」とすねてみせる方もいらっしゃいましたが、なんのかんのと言ってもみなさん話し出すと止まりません。権代先生の詳細なる奥様(同級生)との馴れ初め・おのろ氣話に刺激されてか、後に続く藤井氏や寿浦氏も負けじと若気の至りの恋話などで盛り上がりました。また、中村氏は懐かしさのあまり完全にタイムスリップして「私二十代です」と年齢詐称で通されます。一方、福澤さんは「現在は英語関係の仕事をしているわけはありませんが、英語学で学んだスピリットは決して忘れることはありません」と、グッときてしまふようなありがたい発言をして下さいます。かと思いきや、池田さん、大田さん、松下さんの三同級生は、「あなた達はまだ誕生日が来たけど、私はまだだから私の方が若い」など、目くそ鼻くそ的な舌戦を繰り広げてくれます。すると、「とくに言うようなことはありませんが」と最初はおとなしげにしていた和田先生がたまらなくなり、再度マイクを要求して近況報告を始めて下さいました。さら



に、少し緊張気味だった在学生の岩本君と榎田君も、諸先輩の盛り上がり後に後押しされて、すっかり感想と抱負を語ってくれました。とにかく、あまりに皆さんのお話が盛り上がって、司会役としては時間をオーバーしてしまいそうで冷や冷やしましたし、本当はともおしゃべりな私が、自己紹介では一番遠慮してしまいました。また、皆さんが各自のお話

聞き入るあまり、箸が進まず、料理が有り余ってしまい、もったいないので(ホテルの方々のご好意で)、お開きの時間を十五分ばかり遅らせるほどでした。

そして最後は、山本先生による「今後」もこのような楽しい会を持つには、人文学部で存続していただかなくてはならないわけですから、部長の田中先生には、大学改革で人文学部が潰されるようなことがないように頑張っていただかないといけません」というありがたいお言葉でお開きとなりました。

この後、「もうお酒はいいけど、コーヒード」という話になったのですが、午後十時近くともなると開いている喫茶店が見当たらず(そこが山口らしくていいのですが)、結局道端で立ち話をしながら再会を期した、というオチがつかまりました。

四年後にまた皆さんの元気なお顔を拝見できることを楽しみにしております。そして、今回は残念ながらご参加できなかった方々も次回ぜひお越し下さい。お待ちしております。

(英米語文化論コース委員)
八文学部助教授

独文科同窓会報告

岡光一 浩

恒例になった我が独文科の同窓会を、今回も鴻文会全体の同窓会を終えての遅い十九時から、湯田のセントコア山口で

行いました。例によっていつものことですが、私自身、全体の総会の仕事に追いつけず、独文科の同窓会のお世話が充てられませんでした。今回の同窓会もつばら私の同級生である中村恭亮氏と成末和正氏のご尽力によるものであり、この文章も本来はお二人に書いてもらうのが筋ですが、当方の連絡不行き届きから私が書かざるを得なくなりました。お二人にはお許し願う次第です。今回は、いつも同窓会をいくいと引張って下さる先輩の伊藤義彦氏のご逝去によりなかなか足並みの揃わない、私自身の心の



中もなにか盛り上がりがないものがありましたが、中野安久先生、渡辺信生先生にご出席をいただき総勢十七名の方が集まってくれました。遠くは豊橋や高松からも馳せ参じていただき、皆さんに本当にお礼申し上げます。いつものことですが四年間の空白を埋めるべく話は尽きなく、お酒を酌み交わし食事をついばみながら、同窓ならではの打ち解けた饗宴が繰り広げられ、みんなこの場でしか味わえない楽しさを満喫しました。いつもの会とはほぼ同じ顔ぶれでしたが、今回はいつもと違った若いお二人の女性が花を添えて下さり、以前にもまして話が盛り上がったようでした。いま、しみじみとこうした愉しみもたまには良いものだ、多くの人とこの思いを共有したいと思いつつ駄文を連ねていますが、今回ご出席願えなかった方々も次回は是非ご出席下さるようお願いいたします。

(ドイツ文学・文理第十四回卒)
八文学部助教授

哲学関係同窓会

立川和正

今回の山大同窓会二十周年総会を期して、「哲学関係同窓会」が立ち上げられました。文理学部の西洋哲学と中国哲学の卒業生、人文学部の哲学・倫理学と中国哲学の同窓生によびかけてのことです。母体になったのは、第二学長田中晃先生(現人文学部長田中晋先生嚴父)の

警咳に接した文理学部時代の哲学卒業生による「田中会」という哲学的飲み会です。平成十年に中心の田中晃先生が物故されて途絶えていたのを、残党が集まって、対象者を広げて、正式に名乗りをあげたものです。

準備が拙速であったので、初回は八名の少人数でした。鴻文会総会行事の後、大学近くに集まったのは、「精鋭」であったのか、正に談論風発、哲学もどきの人間論が熱く交錯しました。中でも、初対面になる現哲学教授の上野修先生が入って下さったのは収穫でした。

今後、隔年に会を持つことにしました。事務局を宇部市松山町四一五一一五、立川和正宅に置いていきます。ここから、確実に「哲学」者の輪が広がって行く、そんな熱気と展望のある第一回でした。さーて…。

(西洋哲学・文理第八回卒)

四十四年卒同期会

真方 富美枝

「三年後、八月の第二土曜日、同期会・英米文学科が幹事」と仰せつかってからこの日まで、ずっと頭の片隅にありました。何しろ初めての幹事とまどう事ばかりでした。この度幹事だったというだけで原稿の執筆依頼が来てしまったというわけです。四十四年卒同期会は五年毎に行ってきたのですが、このところ五年後では元気で会えるか自信がないという

ことで三年に一度開催されることになりました。今年卒業して三十三年ぶりに初めて出席した友もいて、本当に嬉し・なつかしの同期会になりました。年もパレてしまいました。誰かが挨拶の時「六年振りに出席しました」と言えば、「いや、君、三年前に来たよ、惣野旅館の時」「いや、あれは阪神淡路大震災の年で、自分が言うのだから間違いない」と、そろそろ若年アルツハイマーになりそうな（いや、すでにかかっている）年になってしまいました。「同学科」の同窓会とはまた一味違って、同期会もいもので、つたのからまるチャペルではなかったけど同じ学び舎で共に過ごした学生時代の思い出話に花が咲きました。I君は下駄を履いて授業に出たらK教授に教室から出されたとか、挙げれば切りもなく、ほんのひとときでも学生時代にもどれるのは本当にいいですね。人生いろいろで話はつきず、二次会へ、続きは枕を並べて夜が更けるまで。翌日は山口にいて訪れたことがなかったという友を案内して龍蔵寺を散索しました。そこにあった徳け封じ観音にお参りする人もいて、さて効果はいかに？

幹事をしてよかったと思うことは返信の近況報告を読むのが楽しかったことです。この紙面をお借りして、今回残念な乍ら出席出来なかった方、三年後にお会いしましょう。その頃は、狂牛病に次ぐ、テロ、報復戦争、不況と混沌とした二十一世紀の幕明けから希望のある世の中に向かっていることを祈っています。いちようやもみじの落ち葉のじゅうたんの上

を歩きながら、木々の紅葉と青く澄んだ青空を眺めていると気分が和らぎます、冷たい木枯らしが吹き、雲が太陽をさえる冬に入りましたが、「冬来たりなば春遠からじ」。獅子座流星群の出現に私もテロのない平和な世界を願いました。教え子の浪人生は「合格・合格……」と願いごとを言ったらしいですがどちらも叶えられますように。

執筆が期末テスト作成の時期と重なり「鴻文」にふさわしい文になりませんでしたがお許しください。

(英米文学・文理第十七回卒)

平成十二年度

人文学部卒業生・

大学院修了生進路状況

人文社会学科

- 建設業
- 住建産業
- 製造業
- 大村印刷、ウィットハウス、福博印刷、
- 東洋プラント
- 電気・ガス・熱供給・水道業
- 日本無線電機サービス社
- 運輸・通信業
- 福山通運、岡山食品輸送
- 卸売・小売・飲食店
- GAKUYA・Co・Ltd、明屋書店、近江屋、山口三菱自動車、インテリアセンター・カーテン夢空間2名、イービーエム、フジ、ミスターマック

入学年度別学生数

学 科(専攻)	性別	13	12	11	10	9	8	7	6	計	
人 文 学 部	人文社会学科	男	42	45	45	67	10	4	2	2	217
		女	59	64	54	40	7	2	0	1	227
	計	101	109	99	107	17	6	2	3	444	
学 部	言語文化学科	男	23	23	33	28	4	5	0	2	118
		女	78	80	71	77	5	0	1	1	313
	計	101	103	104	105	9	5	1	3	431	
部 合 計	男	65	68	78	95	14	9	2	4	335	
	女	137	144	125	117	12	2	1	2	540	
	計	202	212	203	212	26	11	3	6	875	
人 文 学 科 学 研 究 科	地域文化専攻	男	3	8	2	0					13
		女	5	6	2	2					15
		計	8	14	4	2					28
	言語文化専攻	男	3	2	0	0					5
		女	6	4	0	0					10
		計	9	6	0	0					15
合 計	男	6	10	2	0					18	
	女	11	10	2	2					25	
	計	17	20	4	2					43	

ス、カッパクリエイト、サンデーサン

金融・保険業

コーワフューチャーズ、アクサニチダ

ン生命保険

不動産業

積和不動産中国

サービス業

西日本教育社、山口大学附属図書館、

財団法人人・まちネットワーク、宇部

情報システム2名、ワシントンホテル、

全国農業協同組合山口県本部、名村情

報システム、ベルモニー平安閣、チガ

ミ税理士事務所、山口放送、大谷山荘、

クリーク

公務員

山口県庁、大島町役場、萩市役所、宮

崎市役所

進 学

山口大学6名、九州大学、名古屋大学、

北海道大学、広島大学3年次編入

計10名

言語文化学科

製造業

大村印刷、中央出版、再春館製薬、新

潟鉄工

運輸・通信業

福岡エアサービス、防長交通、関光汽

船

卸売・小売・飲食店

不二貿易、ノエビア、日光商品(株)、明

屋書店、加ト吉四国支店、ビッグモ

ター、コーワベッツコーポレーション、

四国うどんグループ、原田屋2名、サ

ンデーサン

金融・保険業

第一生命保険相互、日本生命保険相互

不動産業

レオパレス21

サービス業

ヒューマンネットワーク、山口大学附

属図書館、普賢学園、宇部進学教室、

徳進塾、島根県健康保険団体連合会、

佐藤第一病院、ちまきや、愛グループ、

日品、リーガロイヤルホテル小倉、信

越放送、ラストスタッフ、山陰コンピ

ューターシステム、富士通山口情報2

名、山口ケーブルビジョン、雇用能力

開発機構、JA雲南農業協同組合、シー

エスケー、ヒューマンネットワーク

教員

山口県立日置農業高等学校、山口県立

田布施農業高等学校、長崎県立宇久高

等学校

公務員

岩国刑務所、熊本県鹿本町役場、柳井

市役所、山口県警察本部、大田市役所、

萩市役所

進学

山口大学4名、広島大学、名古屋大学、

慶応義塾大学、神戸大学 計8名

大学院人文科学研究科

地域文化専攻

西日本新聞社、(株)ベネッセコーポレー

ション、長崎県高校教員、出雲市役所

山口県庁

言語文化専攻

福岡工業大学付属高校

転居先不明者一覽表

山 大 生 いまむかし

現在の大学生と昔の大学生の生活を比べると、社会の変化に伴って大きく異なってきた点があるでしょう。また、いつまでも変わらない点もあると思います。

今回は、「食生活（特に学食）」に注目して、両者を比較してみました。古い世代（と言ったら叱られるでしょうか…笑）

のOBの皆さんは、今の大学の学食の充実ぶりにびっくりされるでしょうか…。また、今の学生の皆さんは、先輩方の学生時代の食生活に唖然とするのでは…。この記事が、世代を越えた色々な方々の間に話題提供のきっかけとなったら幸いです。

なお、過去のデータは、昭和40年前後に学生生活を送られた卒業生の方々に、アンケートの形でご協力頂きました。ご芳名は記しませんが、お忙しい中ご協力

下さった方々に、お礼申し上げます。

【昔の学食】

△アンケートの一部から▽

◎「学食」なる施設はなく、寮の食堂が兼用されていた（35年卒）
◎現県立図書館の裏口近辺にあった「文理記念館」の一階が食堂になっていた（41年卒）

◎学食利用よりも、寮や賄い屋の利用が多かった。もしくは自炊。弁当持参の人も多かった（複数意見）

△「文理記念館」の学食のメニュー▽

単品メニューはお惣菜中心、ヒジキや牛蒡のキンピラ、おから、冷奴、季節の野菜の煮物、卵焼き、目玉焼き、焼き魚、オムライス、カレーライス、丼もの、焼きそば、うどん、ラーメンなど。

△寮食の一例とおおよその値段▽

◎朝食：20円（味噌汁・小鉢一品・麦飯・漬物）

◎昼食：35円（カレーか丼物か昼定食）

◎晩食：45円（味噌汁・小鉢一品・焼き魚・麦飯・漬物）

△賄い屋▽

定食中心で、三食で150円までといったところ（当時の文理記念館の学食は定食が一食40円くらい）。街の食堂を兼ねた賄い屋など形態も様々。ツケがきいたり、味噌汁のお代わりができた…。30年代は麦飯中心。季節に応じてワラビやゼン

マイなどの旬のものがだされることもあった。

△アンケートを見ての感想▽

学食は安くて量が多かったものの、賄い屋の方が美味しかったという意見が多数でした。例えば、「卒業後就職して、経済的事情からやむを得ず学食に行ったが、あまりのまずさに空腹にも関わらず完食できなかった」（37年卒）という人もいました。それほどの食事とは、どのようなものだったのでしょうか…（笑）。

また、多くの方が、「味は二の次」「質より量」という回答を寄せて下さいました。中には、「昼食代がなく、コッペパン一個と水の昼食が結構あった」（41年卒）という、危機的状況に陥っていたエピソードも。食堂そのものに関しては、「おおよそ食堂らしからぬ内装で、清潔感がなかった」（41年卒）というご意見が。現在の学食は、改築されたため、きれいで居心地の良い空間になりました。

今では普通に食べている牛肉も、かなりの贅沢品だったようです。記念日や、送別会など、何か理由がないと食べられなかったそうです。そのかわり、食べる時は、たらくく食べたみたいです。美味しさは何倍にも感じたことでしょう。

【現在の学食】

現在、山口大学には二つの学食があり、教育学部近くにあるのが第一学食で、生協運営に変わると同時に「ポノ」という愛称が決まりました。農学部近くには

ある第二学食は、大学が経営しています。こちらの方も、二年程前の改装で広く、きれいになりました。学食は、昼食時には大変混雑し、入りきれないため、売店を利用するという人も多いのが現状です。

▲人気メニュー▼

◎丼物(三〇〇円～四〇〇円)

1位 竜田丼

2位 カルビ丼

3位 マーボー丼

◎麺類(三〇〇円～四〇〇円)

1位 豚骨ラーメン

2位 醤油ラーメン

3位 味噌ラーメン

(冬は鍋焼きうどん)

◎副食

1位 鳥ばん唐揚げ(二五〇円)

※太人気！鶏の唐揚げに大根おろしとポン酢がかかったもの。美味しくてヘルシー。

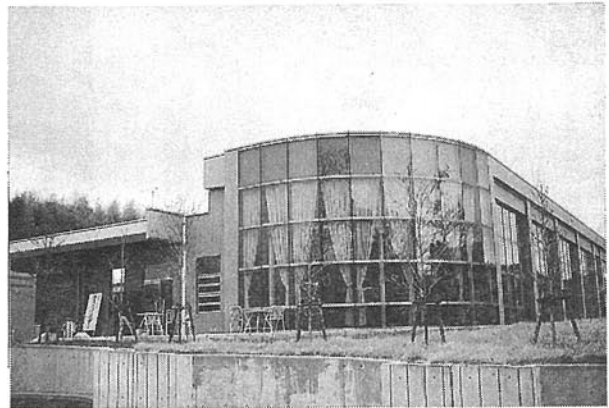
2位 日替わり定食

(二六〇円、21種類ほど)

3位 地鶏の甘辛ソース(二八〇円)

▲その多のメニュー▼

サラダ(二〇〇円)やホットサンド(二五〇円)は女性に人気。また、夕方に行っているバイキング(男性四〇〇円・女性三〇〇円)も好評。パフェやケーキなどデザート類も豊富で人気があります。今の学食は、メニューが豊富で度々変わるの、期間限定でジנגスカンやピビンバがあったり、季節によっては冷やし中華や鍋ものも登場するので、二十年、



三十年前に卒業された方々はびっくりするかもしれないね。

▲今の学生達の声▼

◎早く2コマ目が終わった時は学食に行く。おいしいし、安くていいと思う。

教育学部の近くにあるポーノ(第一学食の愛称)の雰囲気が好き。(女性)

◎「さらら博」にむけて第二学食が期間限定で発売した「さらら定食」があった。ハンバーグなどお子様ランチ風の盛り付けで豪華な感じだったが、さらら博開催時には既にメニューから姿を消していた。(女性)

◎第二学食がきれいで席にゆとりもあるの、いい感じ。第一学食は狭い。(女性)

◎ポーノは人が多いので時間帯をずらすか空席待ちになる。(男性)

◎学食は栄養がとれていて一人暮らしの学生にはありがたい。(男性)

◎季節ごとに〇〇フェアとかあって楽しい。食べたくなるようなメニューが多い。(女性)

◎猫に奪われる(学食のそばには最近猫が多く住みついてます)(男性)

◎バイキングの値段を男女同じにして欲しい。(男性)

▲学生の食生活に一言！第一学食の店長

さんに聞いてみました▼

「だけ食」が多いですね。「丼だけ」「カレーだけ」といった食事の摂り方をするので。栄養を考えて、あと一品、サラダなども摂って欲しいものです。また、ご飯(米)を食べなくなってきました。男の学生さんでもSサイズが標準になりつつあります。主食というよりも、おかずとして米を考えているようです。

学食では、年に4回メニューを大きく変え、また、細かいものは1週間ごとに変えています。レシートにはカロリーを表示し、「朝食たべようキャンペーン(納豆定食・朝鮭定食・カルビ定食)」などもおこなって、学生さんに食生活への関心を持ってもらうようにしていますが、「時間がない、忙しい」と言って、食べない学生さんが多いですね。

◎サーモンチーズフライー二八〇円

▲学食の今(11月末)現在▼

今、第一学食では、北海道フェア中。

北海道ジングスカン二五〇円

サーモンいくら丼一四六〇円

いくら丼一四八〇円

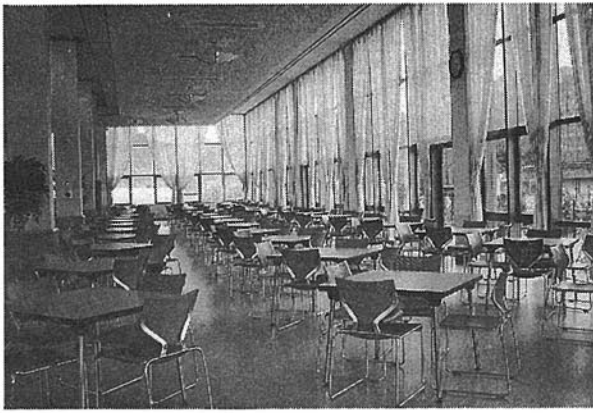
旭川醤油ラーメン一三五〇円

札幌味噌醤油ラーメン一三五〇円

これには取材している私達も驚きました。まさか学食でこのようなものが食べられるとは。学食でも色々工夫しているんですね。学生の間でも、ちょっとした話題になりました。他にも、アジアホットメニューとしてフカヒレ雑炊などもあります。



また、山口の冬はとても寒いので、冬メニューとして、おでん(各六〇円)卵・竹輪・こんにやく・大根・厚揚げ)や鍋焼きうどんも用意されていて、寒い日に



は、結構注文があるそうです。

▲取材しての感想▼

学生の方の話を聞かせて頂いて考えたことは、経営者の方は、学生のニーズに合わせるために、かなりの努力をしていらっしゃるということでした。また、健康面での配慮もして下さっていました。しかし、飽食の時代を当然のようにして育った学生は、そうした学食の皆さんの配慮が十分に理解できないまま、一般の食堂・レストランなどと同じ感覚で利用していたのは事実のようです。

今回、OBの方々の学生生活を知り、今の自分達の生活と比べてみると、いまさらながらのように「学生気質の変化」を感じます。周りの学生にも色々と聞いて

てみましたが、最近の学生には、「質よ量」「安ければ良い」という考えは通用しないようです。大学の近所には、安いファミリールレストランが建ち、ランチメニューを四五〇円という値段で食べることが出来ます。この激安競争の中を過ごしてきた学生達は、「安くて美味しいものを食べる」ことを当たり前のよう感じているのです。また、コンビニが乱立して、食べたい物がすぐそこにある生活をしている学生は、「美味しいものを食べたい」と強く考えるようになっていきます。車を所持している学生も増えて来ました。どこにでも食べに行くことが出来ます。今の学生達には、「消費者としての選択権がある」という自覚が強いようです。年配の方には贅沢だと受け止められるかもしれませんが、今の学生には、贅沢だという意識はありません。むしろ、「贅沢が当たり前」とでも言える学生生活に慣れているのが実情と言えるでしょうか。

(取材—大学院、平山美沙子・大田直子)

編集後記

会報二十一号をお届けいたします。

四年ごとの鴻文会総会が第六回を迎え、昨年八月十二日に開催されました。今回は、二十年に一度となる鴻理会総会との同日開催で、両会共同主催の公開講演

会は、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏を迎え、興味深いお話が聞けました。また、両会合同で行われた懇親会も、参加者が多く盛会でした。総会で役員改選があり、四年間ご尽力いただいた有馬正人会長に代わって、今後は大野光生新会長のもと、いつその発展を期すこととなりました。会員の皆様ますますのご協力をぜひともお願い申し上げます。

今号は、卒業生委員の小野美典氏が編集に加わってくださいました。とくに、「もともと若い会員である大学院生にぜひ鴻文会の仕事に関わってほしい」という、小野さんの強い希望を反映させる形で、新しい試みの記事を全面的にお任せしました。また、小野さんには、毎回の役員会において、鴻文会の運営に関していろいろと建設的なご意見をいただき、学内幹事一同たいへん感謝しています。前号で「転居先不明者一覧」を掲載したところ、予想以上に多くの反響がありました。今号でも依然として不明の卒業生のお名前を掲載しています。お心当たりの方、また、ご自身のご住所、勤務先等に異動のある方も、「異動通知連絡カード」にてお知らせくださるようお願いいたします。

(磯部)

お忙しいなか、本号にご執筆いただいた方々に心からお礼申し上げます。今回、初めて編集をお手伝いさせていただきますました国文卒の小野です。と申しましても、ほとんどは磯部先生が実務を

され、僕が関わったのはごく一部で、編集後記を書くのは、本当におこがましいのですが…。

さて、わたくしは、四年前に鴻文会の役員をおおせつかり、今回の役員改選で、更にもう四年間、役員をさせていただくことになりました。この間、山口大学を取り巻く環境は、日に日に厳しくなってきたようです。国立大学が変貌しようとしている中、その同窓会(鴻文会)のあり方にも変化が要求されています。最近の役員会では、鴻文会の将来を見据えて、さまざまな論議が交わされていますが、「同窓会にとって一番大切なことは、会員(卒業生)の協力」という点では、皆さんの意見が一致しています。これまで、同窓会の運営は、実質的には学内幹事の先生方に任せっきり、と言うのが実情でした。これからは、卒業生を中心に、ひらかれた鴻文会にしていくべく、新たな取り組みが計画されていくと思います。

今回のこの会報「鴻文」も、「若い人達にも読んでいただけるように」ということから、国文の大学院生お二人の全面的な協力を得て、「山大生いまむかし」という新しい試みの記事を掲載しました。お読みになってのご感想はいかがでしょう。また、近いうちに、ホームページの全面的な更新も計画されています。今後は、インターネットでの意見交換なども活発になされていくであろうと予想されます。会員皆様の率直なご意見、積極的なご参加をお待ちしています。

(小野)